

生誕100年／没後20年

柴田南雄さん

小関 康幸

皆さんは柴田南雄（しばた・みなお）さんという作曲家をご存知でしょうか。主に戦後、多くの作品と著作を世に出された方で、1916年に生まれ1996年に亡くなりました。1995年に自叙伝が出版されていますので、それを繙いてみましょう。

東京女子高等師範学校附属幼稚園（現在のお茶の水女子大学附属幼稚園）に通った思い出が綴られています。そこで習った唱歌を後年調べると、大半が東基吉・東くめ編『幼稚園唱歌』にあつたそうです。いまでも歌われる『お正月』なども歌つたのでしょうか。小学校に入学した1923年に関東大震災に遭い、その翌年、蓄音機が家に備えられてレコードを聴くことが始まり、同時期に開始されたラジオ放送も聴くようになりました。中学の途中で自由な校風の私立学校へ転校、ピアノとチェロを学び、合唱にも親しむようになりました。

大学に進学した後も合唱団に加わり、ローゼンストック指揮新交響楽団（現在のNHK交響楽団）とヴェルディの『レクイエム』やシューベルトの『ミサ曲第6番』などを演奏しました。ローゼン

ストックはドビュッシィ、ラヴェル、ストラヴィンスキー、マーラー、バルトークらの作品も採り上げましたから、著者の音楽体験と日本における洋楽受容の一端が重なり合った回顧の一例といえるでしょう。また戦時中、1年にわたって毎週日曜日、神学校のミサにグレゴリウス聖歌を聴きに通った経験が書かれていたり、作曲を師事した諸井三郎氏についても1章が充てられています。

戦後、1946年に著者は入野義朗氏らと作曲家グループ「新声会」を結成しました。1950年前後になると世界の様々な分野で新しい文化が生まれ、西ドイツのダルムシュタットで開催されていた「新音楽のための国際夏期講習」の存在を知ることになります。そして日本で「20世紀音楽研究所」を起ち上げ、現代音楽祭を行う活動に参画しました。その時期は著者自身の音楽観・音楽史観が形成されつつあった頃で、音楽様式の研究を小論文として発表する仕事が始まりました。作曲と並ぶ重要な仕事の分野となります。

ほかに、1947年から放送で音楽の解説を始めたり、子供のための音楽教室（のちに桐朋学園大

学音楽科）を皮切りに、お茶の水女子大学、東京芸術大学、東京大学などいくつかの大学で教壇にも立ちました。さらに新聞や雑誌に音楽評論を執筆するなど多岐にわたる活躍をされています。

1970年から東大寺修二会（お水取り）の取材を始め、日本民謡の基礎理論の研究を含む「音楽の骸骨のはなし」を雑誌に連載し、1973年にその成果は『追分節考』という合唱作品に結実しました。本書は1991年頃までを回顧していますから、学生の皆さんが生まれる少し前から100年ほど前までが回顧される期間です。しかも著者の音楽的経歴の背後に、西洋の音楽史と日本における洋楽受容史が透けて見えるような叙述が試みられています。

本書の特に後半で示される著者の視野の広さや思考の柔軟さは、すでに先の叙述の枠組みを超えているように思えるほどで、とても興味深く読むことができました。

紹介する資料

● 柴田南雄 『わが音楽わが人生』

岩波書店、1995（請求記号●

C60-382）